マス・コミと機関紙の使命

奥田八二

誰でも朝夕新聞を読む。新聞が休みの日や旅先などで一日新聞を読まないと何だか大きな忘れものをしたような気持がする。忙しいときは見出しの拾い読みだけでもしたい気になる。程度の差こそあれ、ラジオについても同じようなことがいえる。テレビもだんだんそうなつていくだろう。好きな人ならしばらく映画をみないと、ニコチン中毒者がタバコを欲しがるような気持になるだろう。新聞やラジオや映画などは、今日では、それほどまでに私たちの日常生活に深くくいこんで一種の生活必需品になつてしまつている。一九二六年のイギリスの炭鉱労働者の賃下げ反対ストを中心としたゼネストが失敗に終つた原因の一つに新聞労組が同情ストに入つたことをあげる人があるが、それも新聞がパンと同様に英国大衆の日常生活必需品になつていたことを物語つている。

しかし、新聞、ラジオ、雑誌、映画、テレビなどによるこれらいわゆるマス・コミュニケーション（大衆報道）がパンのように生活必需品になつているといつても、決してパンと同じ意味においてではない。私たちはこれらによつて見聞をひろめるわけだが、同時にこれから得たものを主たる材料として個人的にも社会的にもどう生活していくかの態度をきめている。もし正しい報道がなされなかつたり、一面だけの報道であつたり、ゴマ化されやすい印象を与えられたり、特殊な意図をもつ報道であつたりする場合にはマス・コミをたよりに生活する私たちの生活態度は、私たちの願いに反した影響をうけてしまうのである。マス・コミが問題とされるのはこの点に理由がある。

（二）

マス・コミは何といつても高度に発達した機械文明の所産である安価な報道が迅速に大量に（大衆に）しかも繰返し伝えられるには高度に発達した技術と機械なくしては不可能である。資本主義社会ではこれらの手段は資本家がもつている。しかも独占的な資本の力で報道が行われている。つまりマス・コミの提供は独占資本の企業が行う。

それにマス・コミは大衆への報道の一方的な伝達という特性をもつている。新聞、ラジオがどのような報道をしようとも、大衆はこれに対して報道を返すことはできない。新聞を破つてみたり、ラジオのスイッチを切つてみてもはじまらない。演説会だと聴衆は拍手で答え、またはヤジることもできる。新聞、ラジオの報道に対しては、どんなに不満があつても、胸のうちにしまいこんでおくより外はない。投書という手が残されているが、これをどう扱うかは独占企業の編集方針の自由なのである。

さらに、報道内容は独占資本によつて資本の都合のよいように作られる。少くとも資本に都合の悪いようには作られない。国内、海外のニュースもその線に沿つて選択され、編集される。この点報道資本の都合だけが考慮されるのではなく、資本全体の連帯がつねに考慮される。保守党政府がどんなに悪くても資本主義を擁護するための最後の一戦だけは絶対に守られている。

また、マス・コミをうける大衆は孤立させられる傾向にある。大衆は報道を家庭において、死んだ報道機関と一対一で、報道をうける。それに対して問答できぬ大衆は、はじめはその報道に疑問があつても、繰返し繰返しなされる報道によつて遂に疑念をマヒさせられ、自主性を失い、むしろ報道内容をそのままウノミにしてしまい報道の受信機と化すのである。こうして作られた大衆の意見がそのまま世論だということにもなる。

（三）

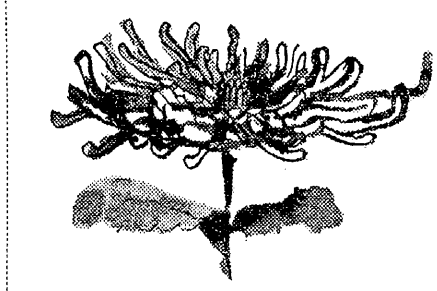
しかし、大衆はこうしたマス・コミに対して全く機械的に受身になつてなすところを知らないものであると断定することは誤りである。今日の大衆は単なる分量としての大衆ではない。かれらの大部分は好むと好まざるとにかかわらず、不断に日常の階級闘争に引きこまれ、あるいは積極的に団結してこれに参加していく。かれらは殊に労働者大衆は職場や家庭生活の体験から、さらには生活を賭した資本との闘争から、マス・コミに対する批判的な態度を身につけつつある。

だが何といつてもマス・コミの威力はあまりにも大きい。それは私たちの心的態度の栄養としてすでに血となり肉ともなつており、たえず更新され補給されている。それが含む毒性は放つておかれない。毒消しが必要である。

労組の行う学習活動もこの毒消しの一つに違いない。しかし毒を制するに毒をもつてする手もあるその意味で同じくマス・コミである組合や政党の機関紙が注目されなければならない。けれどもこれらは独占資本によるマス・コミ機関にくらべると、あまりにも規模が小さく、範囲も狭く、度数も少い。毒消しとしてはまだまだ心もとない。

機関紙の日刊化や読者層の拡大があちこちで課題に上つているのもこうした意味あいからであるがそしてそれも大へん結構ではあるが、そうした努力とともに、単にいわゆるマス・コミに追従したやり方だけではなしに、機関紙の内容充実と、既存の機関紙を十分よく読む運動も忘れられてはなるまい。

五百号記念



特集

弾圧や苦闘を超えて活字の戦士であれ！

みいけ五百号を迎え歴代編集部長の辯

1　編集に当つて嬉しかつたこと
2　編集に当つて苦しかつたこと
3　今後の「みいけ」に望む。
4　機関紙をテーマとしての川柳

☆　☆　☆

労働組合が出来、機関紙が生れ、五〇〇号になつた。甚だ簡単なようであるが、この陰には組合の歴史があり、闘いの連続がある。一枚の機関紙が全組合員の意志を統一し、闘いへの寄りも表現出来る。活字の戦士である「みいけ」が今日あるのは全組合員の協力とこの出版に当つた歴代編集部長の努力の結晶である。編集部では歴代編集部長にその当時の想い出を次の要領で寄稿してもらつた。

☆　☆　☆

革新的な統一した地方新聞を

池田　利治

1　初のガリ版刷りで、それも執行員数程度だつた発行部数を、活版刷りに改め、組合員全部に配付できるようになつたときは、初代編集部長として流石に感慨無じものを望んでいる。以下問題点を列挙して見よう。

一、現在十段に組んであるが、余りギツシリ詰つて見にくい。八段か九段にして活字も大きくする。
一、文章は出来得る限り話し言葉で書く。
一、文芸欄、文化欄の飛躍的拡充強化。
一、前進、主張欄は廃止、若しくは簡素にしたい。
一、トツプ記事の取扱いについては特に慎重を期し、要点を平易且つ簡明に表現する。
一、見出しは使い古されたもの、又はわれわれが不感症になつた言葉をさけ、新鮮な感覚の用語を用うる事。
一、カツトが欲しい。

宮浦坑　仕繰　上田義光

大衆にわかり易く

私達主婦会員として「みいけ」を読ましていただいておりますが以前より読易く、判り易くなりました。希望としては、第一面についての主要な問題の取扱い方は良いと思いますが、見出しの活字を少し大きくして大版写真を入れてもらつたら良いと思います。第二面には各単産の活動状況（大牟田区）を、第三面には各三鉱労組の支部、地域、職域分会の活動状況を第四面には主婦会を主体にした活動状況、生活改善、その他資見欄を充実して頂き、出来ますれば今週の映画案内、季節に応じた料理等を掲載して頂ければ幸甚だと思います。又意見、創作等についての呼びかけを毎号欄外に記載して投稿に対する意欲を啓蒙し、その時々の問題をスローガンの様式で記載されたら良いかと思います以上編集上の要望を申述べましたが、総体的には機関紙のモツトーとする大衆にわかり易く、読み易く、機関紙の早く発行される日を待ち切れないとの声に、満ちあふれるよう努力して下さい。

愚見でありましたが、今後の発展を切望致します　（一主婦）

俺にもいわせろ

いつもながら編集部の企画が悪く十分に組合員や家族皆様の云いたいことも聞く、機会がなく誠に心苦しく思つています。こんどは五〇〇号記念に組合員や家族の方々の遠慮のない「みいけ」批判を願つています。今後もどしどし俺が編集部長になつたらの弁を期待します。

文藝欄の拡充

商業新聞、ラジオ、映画等、マス・コミの氾濫する中で又益々複雑化する社会生活の中で如何にしてわれわれの機関紙を読み、又読ませるか、要するに私達は見た目もおいしく、然も腹八分に食べて十分われわれの血となる

輪転機による日刊発行と家庭への配達

北原　一男

1　2　昭和二十二年三月炭協（炭労の前身、一般に炭金協と呼んでいるが、規約による正式略称は炭協）の鉱業連盟に対する第一回交渉妥結をめぐり福労協を構成している。民連、日鉱、金炭の三組織間において混乱を起した事は

「みいけ十年」にも記述してある通りであるが、民連の幹事と三池の代議員及び機関紙編集人を兼ねていた私は、その間約一カ月に飯塚（十七回目帰り出張をしたが、朝五時頃に出発し、夜十時頃帰るこの隔日位の出張は、現在のような食糧、交通事情でも決して生易しい事ではなかろう。ビロードな話だが血のような涙を垂らしながら通つたものであつた。三池に帰ると早速機関紙や号外の編集、印刷それを持つて又出張、日鉱、金炭係の代議員にまでバラまいたものであつた。紙も商店へ頭を下げて分けてもらう。印刷もくろだいや印刷工場に依頼といつた具合で、大組、印刷が徹夜の例も少くなかつた。拙い機関紙だつたが、出来上りのうれしさは格別であつた。

3　輪転機による日刊発行と家庭への配達。

4　スクラムのとどろきあふれている「みいけ」

五百号までの歩み

号数	氏名	任期の期間
1～5	池田　利治	21,12, 1～22, 2, 1
6～41	北原　一男	22, 2,11～23, 2, 2
42～83	水元　盛広	23, 2,18～24, 1,10
84～94	大道　博	24, 1,17～24, 4, 4
95～133	村田　修一	24, 4,11～25, 1,23
134～168	池田　利治	25, 2, 6～25,11, 1
169～175	大道　博	25,11,10～26, 1,15
176～207	吉富　正信	26, 1,25～26,10,21
208～381	平島　敏治	26,11, 2～30, 6, 5
382～432	山本　博貫	30, 6,12～31, 6, 9
433～500	平島　敏治	31, 6,17～現在

大牟田、荒尾を地盤に革新的大衆新聞を

水元　盛広

1　今の「みいけ」は大衆に迎合する意味でなく大胆に大衆の意志を編集の中に生かしてあります昭和二十三年、私の編集長当時の組合は「知らしむべからず、寄らしむべし」の傾向が強く、動もすると機関紙も執行部独善に傾くおそれがあり、その中で機関紙本来のあり方と、編集権の権威を維持してゆくのには苦労した。

2　戦後の廃墟の中を工場機械をさがしてまわり、木賃宿でシラミの土産をもらつたりして苦労したが、その工場で「みいけ」の第一刊が印刷されたときは感無量だつた。

3　第一着手としてまず大牟田と荒尾を地盤に革新的大衆新聞を作ること、これは勿論世界ニュース、国内ニュースを盛つた日刊紙で、この新聞を読めば一般紙をとる必要がないまでにする。第二に急速に進歩したマスコミに対応するために各社宅に組合の放送施設を持込み、ニュース、娯楽番組など本部から放送する。これは緊急の場合重要な闘争の武器になる。

4　首桶もなつかしい闘争特集号

社会記事を盛りこんだ日刊紙に

大道　博

1　水元前編集部長の後任として「みいけ」の編集を担当したが

二十四年二月三日組合創立三周年記念祝賀式を宮原講堂で開催し、これを力強く機関紙に表現する機会を得たこと――十年の式典を迎えてまことになつかしい。

2　アメリカ製労働組合であつたため組合活動、生産面にいろいろと口を出し、会社に協力を奨められたが、これを拒否すると沖縄に重労働させるかの如くケンセイしたことは忘れられぬ。機関紙もプレスコードによつて、書きたいことも思うように書けなかつたことは編集担当者として敗戦国のアワレさをしみじみ知つたまことに今から考えると情なく、苦しいことであつた。

3　朝、目をさまして毎日「みいけ」が読まれ、政治、経済、スポーツ、もちろん日本選手権野球その他一般紙に負けぬ編集で出版されることを希む。

4　下手な字も活字になれば読めるもの

市民にも親しまれる大牟田機関紙に

村田　修一

1　機関紙の動脈とも考えられる印刷工場新設が一番うれしかつた。

2　新設に伴い部数も増し紙面も十分とれるようになつた。機関

紙としての使命発揮がこの頃と思う。その後、優秀な編集担当者が続々と現れ、今日では組合機上の機関紙とまでなつている。

3　私の今後の夢は組合内部はもとより、大牟田全市民にも親まれる大牟田機関紙とまで育てあげてゆきたい。

「みいけ」こそ社会主義社会への旗印

吉富　正信

1　「みいけ」が組合員一人一枚配布されるようになつた直後であり、投稿がほとんどなく記事の収集は足でかせぐほかすべがなかつた。文化面の記事がうまくできず、魅力ある編集ができなかつたことはその都度の悩みであつた。

2　その一つは、昭和二十六年七月二十八日付一九六号より夕刊を大判に切替えたこと、その二は二〇〇号記念を大判四頁刷りで出版したことである。これについては執行部全員の協力があつたことは申しのべるまでもない。

3　「みいけ」編集により「クロダイヤ」の陰も薄まる。やがては「みいけ」の前に膝を屈する日も遠からじ、資本のマス・コミを斬従える戦士こそ「みいけ」であり、「みいけ」こそ社会主義社会への旗印。私の眼には七色の虹に浮ぶ幾千万枚の「みいけ」が映る

4

○妻も子も読んで「みいけ」はとじられる。
○機関紙がきて「毎日」は後にする。

日刊〃労働タイムス〃五万枚発行

山本　博貫

1　四十三日スト時、商業新聞が先行するためネタが古くなつて編集に弱つた。

2　活字鋳造機が軌道に乗り、新活字の機関紙が刷り上つたとき

3　大地評傘下労組の機関紙を統合し、日刊〃労働タイムス〃？五万部発行。

4

○五百号記念下手な川柳作らざれ
○組合の強さ活字の使いよう。